留学報告書

苅田 裕也

2022 年 6 月

UC Berkeley, Biophysics Graduate Group 6 年目の苅田裕也です。 船井情報科学財団からのご支援をいただいて 2016 年度から留学をしています。

1　研究

2 月ごろにようやく論文が出版され、この半年は卒業に向けて他のプロジェクトをまとめるための実験に追われていました。現在の予定としては、9 月頃に博士論文を提出し、11 月頃から次のポストで研究を続けるつもりです。予定はカツカツですが、乗り切りたいと思います。

卒業した後はドイツのマックスプランク研究所でポスドクをする予定です。マックスプランクはドイツ各地に遍在していますが、その中でも特に僻地にある研究所で、進化生物学を専門にしています。場所は Plön という北ドイツの小さな町、もとい村で、湖に囲まれた風光明媚な田舎です。立地に関して家族から小言を言われますが、個人的には湖畔での生活を楽しみにしています。とりあえず、渡独したらすぐ車を手に入れて最寄りの都市に脱出できる体勢を整えたいと思います。

2　子育て

1 月に長男が誕生し、この半年は目まぐるしい生活でした。アメリカでは産休が二か月ほどで終わるケースが多く、うちは両親ともに早めに仕事復帰したため、保母さんやデイケアをフル活用して子育てをしました。両親以外の人間に触れる機会が多くなったので、子どもにとって良い刺激になっていれば嬉しいところです。

我々がまず活用したのは、バックアップケアという単発型の訪問サービスです。子どもを施設に預けるタイプのデイケアは、最低でも月齢 6 か月が必要なところがほとんどなため、2-3 か月の時期は仕事をパートタイムで復帰し、両親で補えない時間をバックアップケアにお願いしていました。訪問してくれる保母さんが毎回変わるのが欠点ですが、学生向けには大学の割引で 1 時間 4 ドルという破格の割引があったので大変たすかりました。

仕事にフルタイムで復帰してからは、運よく見つかった小規模なデイケアに通わせていました。普通のデイケアであれば、若い月齢や短期の通園は断られることが多いのですが、例外的に快く受け入れてくれた保母さんには感謝が尽きません。長男も機嫌よく過ごしていたようでした。

3　最後に

留学生活も大詰めとなりました。研究室の同期が一足先に卒業したので少し焦りはありますが、ストレスが溜まったときは、長男のマシュマロ頬っぺたを小突いたり、赤ちゃん特有の匂いを吸って精神の安寧を保っています。

おそらくこれが最後の報告書となりますが、振り返ると、船井財団には留学当初から多方面でお世話になりました。なりよりも、出願時に奨学金があることの威力は絶大で、合格の大きな手助けになったと実感しています。また、渡米直後のはじめての交流会@サンフランシスコでは、先輩方や同期に相談する機会をもらえましたし、まだアパートが見つからずホテルを点々としていた身にとっては寝床や美味しいご飯も助けになりました。ベイエリアには船井の奨学生が多く、留学初心者にとっては心強かったです。特に、畠山さんと金石さんには生活面でいろいろとお世話になりました。金銭面でのサポートに関しても、先学期に teaching をはじめてやりましたが (卒業に 1 セメスターの teaching が必須)、あれを複数やる可能性があったかと思うとぞっとします。金銭面でのサポートがあったことで、確実に研究に集中できたと思います。

6 年間の留学生活を通して、家族のライフイベントを含め、本当にいろいろな貴重な経験をすることができました。改めて、船井財団の手厚いサポートに感謝申し上げます。研究面での社会貢献や、(需要があれば) 後輩へのサポートによって恩返しできればと思います。ありがとうございました。

図 1: 友人の結婚式の空き時間に休憩しているところ。長男は生後 5 か月。